話せぬだけ 心の言葉豊か

障害者に手添えて「指談・筆談」

久喜のNPO 新たな支援の道探る

自閉症などで言語を発しない人の内面に、実は豊かな言葉があるのではないか――。障害者支援のNPO法人「あかり」（久喜市）が、閉ざされた世界の「鍵」を開ける取り組みを続けている。心の中の言葉を探り、寄り添うことで、新たな支援の道が広がる可能性があるという。

障害者が動かす指やペンに手を添え、ひらがなを書こうとする微妙な動きをとらえる。国学院大人間開発学部の柴田保之教授が「指談・筆談」と呼ぶ手法だ。

「人生が新たに始まった気がします」。柴田教授との筆談に初めて取り組んだ自閉症の男性は、心境をそう表現した。男性は特定の場所や時間帯で急に泣き出すことがあって、あかりの指導員は支援の仕方に悩んでいたが、男性は「仲間のことを思い出すからです。見守ってくれるだけで大丈夫です」とつづった。

障害児支援をきっかけに約20年前から言語表現の研究を続ける柴田教授が、5年ほど前から障害者とのコミュニケーションに活用している手法。あかりでは昨年3月から、柴田教授の協力で取り組み始めた。

障害がある人の中には、体を自由に動かせなかったり、自己の制御を超えて体が勝手に動いたりする人もいる。文字を書こうとすると、頭の中で表現が消えてしまうことも多いという。指談・筆談は手を添えて介助することで、意図する文字を引き出す。キーボードで自由に文字を選ばせる手法もあるが、指談・筆談は障害者側の負担が小さく、活用の場が広い。

久喜市をはじめ加須市、宮代町などにあるあかりの各事業所に通う、特別支援学校生から成人までの約600人のうち、保護者の了解が得られた60人近くがこれまでに体験した。家族への感謝や仲間への思いなどが様々につづられ、気持ちを詩にした若者もいる。

あかりの川岸恵子代表理事は「自己をうまく表現できずに彼らは苦しんでいると思う。言葉の世界が開かれると、表情が変わり、行動にも落ち着きが出てくる」と話す。あかりの指導員も手法を学び、支援に活用し始めた。

「指のかすかな動きを追い、『通訳』をするのに似ている」と柴田教授。ただ、支援する側にとって「都合の良い言葉」だけを取り上げてしまう危険もあるといい「寄り添う姿勢が大切だ」という。

言葉を発しない障害者は「何もできない」と見られがちで、実は能力に対して十分な支援を得られていない場合も多いという。あかりの古堺義通統括責任者は「言葉が単に表に出ていないだけだと分かったとき、周囲はその内面の豊かさに驚き、これまでの対応がどうだったのかと悩んでしまうこともある」。保護者らを含めた包括的な支援のあり方を、今後も探っていくという。

（高橋町彰）

手を添えて介助し、障害者の意図する言葉を引き出す柴田教授＝久喜市のあかり事業所

■「あかり」での「指談・筆談」の記録から（抜粋）

高校生年代の少年　「まさか手を添えてもらうだけでこんなに楽に字が書けるなんて夢みたいです。感激しています。よくお母さんが『あなたは、何でも分かっているのにね』と言ってくれたのが本当だということが証明されたようなものです」

中学生年代の少年　「夢を絶対あきらめてはいけないです。夢は普通の子どもとして生きることですが、仲間と過ごしていたら障害というものをしっかり見つめて生きようと思うようになりました。だから、夢は自分らしく生きるということです。普通でも障害でも自分らしさは同じですから」

成人男性　「僕たちは何でもよく分かっているけれど、うまく表現できないだけなのです。字もじつはみんな知っています。ただ、しゃべれないだけですから」